

## 「長子の権利とレンズ豆」(要旨)

聖書箇所：創世記25章19~34節

### 【1】主に祈ったヤコブ

アブラハムの息子イサクは、40歳の時にリベカをめぐりました。その後二人は20年間の誕生を待ち続けました。イサクは悩みの中で神に祈りました。「イサクは、自分の妻のために**主に**祈った。彼女が不妊の女だったからである。**主**は彼の祈りを聞き入れ、妻リベカは身ごもった。」(創世記 25:21)

イサクが60歳の時、リベカはみごもり双子を出産しました。最初に出てきた子は赤くて全身毛衣のような子。エサウと名づけられました。その後でてきた弟はエサウの「かかと」(𠂇𠂇𠂇)をつかんでいました。ヤコブと名付けられました。

旧約聖書で子の誕生に際して両親の苦悩と熱心な祈りが記録されている人物として、エジプトの宰相となったヨセフ(創世記 30:22)、イスラエルの英雄サムソン(士師記 13:1~5)、そして最後の士師であり最初の預言者であるサムエル(1サムエル 1:10~11)が挙げられます。

▷苦難の時に神と向き合い神の助けを求めて祈ることができますように。

### 【2】イサクはエサウを、リベカはヤコブを

イサクとリベカの結婚は多くの読者が憧れを抱く美しいものでした(創世記 24章)。しかし結婚後の生活はどうでしょう。聖書は、子どもたちへの愛情の注ぎ方の偏りについて記しています。父イサクはエサウを愛し、母リベカはヤコブを愛していたと。父イサクがエサウを愛したのは彼の獵の獲物を好んでいたからで、母リベカは天幕に住み穏やかなヤコブを愛しました。母の目から見れば、ヤコブこそ頼りになる息子でした。**主**の「兄が弟に仕える」(創世記 25:23)

という約束を心に留めつつ、出生順故にエサウが長子の権利を有していたことを快く思っていなかったのでしょうか。母親と多くの時間を過ごすヤコブには、そうした母親の思いが手に取るようにわかりました。

### 【3】長子の権利とレンズ豆の交換

イサクは妻リベカに示された**主**のお告げを心に留めなかったようです。そのためエサウは「長子」であることを理由に、財産の2倍の分け前を受け取る予定でした(出エジプト13:2, 申命記 21:17)。その「長子の権利」には、物理的に親の財産を受け継ぐだけでなく、神からの特別な祝福という霊的な側面も含まれていました(創世記 28:1~4)。また特権であると同時に責任が伴いました。しかしエサウは目に見えない神の霊的な祝福よりも、その場で手に触れ、目で見、舌で味わうことのできるものに心を寄せ、自分の肉の欲を満たすことを選びました。彼は自分に約束された特権と責任を軽んじました。聖書はそうしたエサウを「長子の権利を侮った」と言います。ヤコブは空腹に苛立ち「長子の権利など、私にとって何になろう」(創世記 25:32)と言い放つ兄の弱みに付け込みました。

エサウとヤコブ、彼らはそれぞれ人格者とは言い難い弱さを抱えています。しかしヤコブは、神の祝福を誰よりも切実に求めました。

▷あなたが今日切実に求めているものは何ですか。



「レンズ豆」(いのちのことば社『新聖書辞典』より)